



成隣だより

令和4年1月28日
第10号
昭島市立成隣小学校
校長 星野 典靖

身近にある「学び合いの場」を大切に

副校長 神宮 正和

新年のスタート、1月11日（火）の朝、体育館での出来事です。

この日は、3学年ずつに分かれて始業式を行うことになり、準備のため、少し早めに体育館に向かいました。静かな体育館。足を一步踏み入れたとき、私の背中がゾクッとするような感動の光景が、そこにありました。6年生全員が、姿勢良く体育座りをして、すでに並んでいたのです。一人一人が背筋を伸ばし、体を前に向け、そして、一言のおしゃべりもなく、実に堂々とした態度でした。後から入場した他学年の児童もその姿を見て、自然と整列することができ、本当に落ち着いた空気のなかで、始業式を行うことができました。

実は、2学期の終業式でも全体への整列の号令がほとんどないなかで、静かに話を聞いている全校児童の姿が見られました。新型コロナウイルス感染症対策として「他学年と並んで話を聞く」という機会が限られているなかで、このような場面で「学び合うことのできる」成隣小学校の子供たちの素晴らしい力を感じます。

「アイコンタクト」という言葉があります。

お互いに視線を交わすこと、目を合わせることであり非言語コミュニケーションの一つとされています。スポーツの世界では、目と目で何らかの合図を送り、意思の疎通を図る場面で使われます。また、小学校の外国語活動では、「アイコンタクト」「クリアボイス」「スマイル」というコミュニケーションキーワードの一つとして使われています。マスクを着用している現在だからこそ大切にしたいことです。

職員室に用事があって訪ねてきてくれる子供たちは、「〇年〇組の△△です。□室の鍵を取りにきました。」と明確な言い方（クリアボイス）で伝えてくれます。それを受ける私たち教職員も目を合わせ（アイコンタクト）、笑顔（スマイル）でコミュニケーションを図ることを意識しています。

日常の身近なところに、人と関わり合うことのできる場面はたくさんあります。人の姿から学ぶことのできる場面はたくさんあります。その機会を見つけたら、そこで「よいところ探し」を試みることを、お勧めです。（決してあら探しではなく。）

そして、自分の言動の課題に気付いたら、次の機会には意識していくこと。

身近にあるからこそまだ気付いていなかった「学び合いの場」を価値付けていけるように、教職員一同、日々の教育活動に取り組んで参ります。